

審査結果要旨

研究科 文学

専攻 英語英文学

氏名 青木 愛美

1. 学位論文題目

Imagery of the Circle: A Study on Mary Wroth's Corona

2. 学位論文の審査

審査委員

| | 職名 | 氏名 | |
|----|--------------------|---------------|---|
| 主査 | <u>教授</u> | <u>福士 航</u> |  |
| 副査 | <u>教授</u> | <u>石橋 敬太郎</u> |  |
| 副査 | <u>教授</u> | <u>植松 靖夫</u> |  |
| 副査 | <u>フェリス女学院大学教授</u> | <u>富樫 剛</u> |  |

審査結果要旨

本学位論文は、英国ルネサンス期の詩人 Lady Mary Wroth (1587-1651/3) の女性詩人としての自己成型を論じる。その際、本論文は、Mary Wroth が Sir Philip Sidney の姪であるが故に様々に影響を受けてきた Sidney 家の文学的伝統を参照枠とし、その中で Wroth の詩作を理解しようと試みる。なかでも Sir Philip とその実弟の Robert Sidney (Mary Wroth の父) がともに用いた corona あるいは crown of sonnets と呼ばれる詩形を Wroth も利用していることに着目する。Philip、Robert、Wroth それぞれがその詩形をどのように用いているか、その詩形と詩の内容がどのように関連しているのかを、「円」のイメージ分析を中心とする詩テキストの丁寧な精読をもとに提示している。最終的には、Sidney 家の文学的伝統を受け継ぐだけでなく、Wroth が女性詩人として独自の文学的アイデンティティを確立したことを説得的に論じている。

序論において、主要な先行研究の論点が紹介され、corona という詩形の利用を軸に Sidney 家の文学的伝統を分析するという本論文の学術的独自性が強調される。詩形としての corona とは、ソネット連作において、各ソネットの最終行が続くソネットの第 1 行と同一

語句で形成され、最終ソネットの最終行が最初のソネットの第 1 行と同一語句になることで、全体として王冠 (corona) のように円構造を形成するものである。先行研究ではほぼ等閑視されてきた Sidney 家の詩人たちによるこの詩形の利用に着目し、詩形と詩の内容との関連を精査することが述べられる。

第 1 章では、Wroth に先行する詩人たちがどのように corona という詩形を利用していたかを、John Donne と Philip Sidney の二人の詩人について精査する。Donne の 'La Corona' は、キリストの生涯から 7 つの場面を選んだ宗教詩ソネット連作であるが、各ソネットの内容のみならず、corona という詩形も神の永遠性を象徴するために機能していることを指摘し、その永遠性を強調するために円のイメージが用いられていると論じる。一方で Sidney の corona は、散文ロマンス作品である *The Countess of Pembroke's Arcadia* の内部に現れ、Strephon と Klaius という二人の登場人物が交代で 10 行詩 (dizain) を作るという形式をとる。本論文が着目するのは、Sidney の corona でうたわれる内容が失恋である一方で、それを語る corona に続く散文箇所にも、corona の内部で用いられていた詩行が繰り返されるという点である。これによって corona でうたわれていた失恋

の悲しみに言わば出口が与えられ、悲しみからの解放が示唆されていると論じる。

第2章では、Robert Sidney と Mary Wroth の父娘が、それぞれのように corona を用いたかの分析を行い、Wroth が伝統的な詩形に新たな意味合いをつけ加えていることを指摘する。本論文が着目するのは、Robert の corona の不完全性である。通常の corona では、最終ソネットの最終行が最初のソネットの第1行に回帰し円環を結ぶ構造を伴うが、Robert の corona はそのソネットの連鎖を途中で放棄している。この点には様々な理解の可能性があるが、本論文は、Robert の corona でうたわれる内容を精査し、内容と形式との関連を論じる。ソネットを捧げる相手の女性の美を十分に描くことができないことを詩人は嘆いており、詩人の技能不足の言わば証明として、Robert は corona を敢えて完成させなかったのだと主張する。Philip Sidney の corona は恋する相手を失うことの悲しみを主題としており、Robert の corona に描かれる「不運な恋人」の像は、先行する詩人 Philip の詩的主題を受け継ぐものと理解できる。この詩的主題を Wroth も corona において継承しているが、彼女が用いるのは円環構造を持つ通常の corona である。Wroth の corona でうたわ

れる内容は、女性の声で語られる報われない恋の悲しみであり、Mary Wroth が恋人 William Herbert との関係で経験したことが下敷きになっているとするのが従来の研究の基本的な理解であった。本論文では、宛先に届くかどうかもわからない手紙という形式で corona が企図されていること、さらに特異な単韻詩形式が含まれていることなど、詩の形式面を精査すると「出口のない迷宮」として提示されていることを論じる。出口のない迷宮の中に、報われない恋の悲しみを嘆く女性の声を描き出している点に、本論文は、Wroth の corona の独自性を見出している。

第 3 章では、ソネット連作において女性の声がいかに表現されるかを、Philip Sidney の *Astrophil and Stella* における Stella の声を精査することで検討する。この章は、続く第 4 章で行う、Wroth の *Pamphilia and Amphilansus* における Pamphilia の声の分析との比較対象となる。Petrarch 以来のソネットの伝統では、男性詩人が恋する女性の美を讃える形式を踏襲し、従って男性が発話する主体となり、女性が客体化されるというジェンダー的権力の不均衡を含んだ二項対立が保持されるが、本論文では、Sidney のソネット連作において、そのような言説への対抗を見出す。男性に表象されるだけ

の立場であった Stella が、徐々に声を獲得し、最終的には語る主体となるまでを、丹念にテキストの精読を積み重ねながら追跡する。Petrarch 以来の恋愛詩の伝統の中で、Sidney が、男性詩人に靈感を与える存在としてだけでなく、詩人の技能の体現、言い換えると詩の根本そのものにまで Stella という女性に役割を与えている様を、丹念に掘り起こしている。

第 4 章では、corona を中心としながら *Pamphilia to Amphilanthus* 収録の詩全体を広く読み込み、Wroth が Sidney 家の伝統を受け継ぎながら女性詩人としての独自の主体性を獲得していく様を論じる。Wroth の corona が “labyrinth” として提示されていることは、corona の第 1 ソネット第 1 行と、最終の第 14 ソネット最終行でその語が繰り返し用いられているところから明らかであり、先行研究でも繰り返し指摘されている。本論文の独自性は、その迷宮的構造の中に閉じ込められた話者 Pamphilia が、自らの欲望を語りたいけれども語れないジレンマに陥っている様を、詩の精読をつうじて読み取り、そこに当時の美德とされた「沈黙」の規範に取り込まれて自らの言葉で語ることを放棄させられている女性詩人の苦悩を重ねて読むところにある。その際に着目するのが、Cupid のイメージ

である。エロースに代表される放埒で官能的な愛とアンテロスに代表される貞淑な愛の両方が Cupid によって表象されてきた図像学的伝統を確認し、Wroth の corona では Cupid のイメージが後者へと変化していくことを指摘する。それによって Wroth は、男性詩人の恋愛詩では描写の対象となってきた女性の身体を、Pamphilia が描写することを避けており、むしろ Cupid を、迷宮からの出口を指し示しうる導き手の神として描いており、本論文はそこに Wroth の女性詩人としての独自性の一端を見出す。本論文が着目するもう一つのイメージは“cabinet”である。当時の手稿回覧の文化では、私室の中に置かれた cabinet の中に手稿を仕舞い込み、極めて親密な間柄の人たちのみが読者となって手稿回覧を許可されていた。Urania には、cabinet に隠された Pamphilia の細密画を Amphilanthus が所望する場面がある。技巧を凝らして描かれたこの細密画を、本論文は、同じように精緻な技巧を用いて構成された corona の比喩として読む。本論文がこの箇所で見出している詩と絵画のアナロジーは、Philip Sidney が *An Apology for Poetry* で詩を論じた有名な一説、すなわち “a speaking picture” の芸術としての詩に淵源がある。Philip Sidney に端を発する Sidney 家の文学的伝統を受け継ぎながらも、

Wroth が女性作家として新たに独自の貢献を果たしたことを説得的に論じた本章は、本学位論文のなかでも特に独創性に富み学術的価値の高いものとなっている。

一方で、本論文にはいくつか短所があることも指摘せねばならない。一つには、Sidney 家の文学的伝統という大きなテーマを、corona という詩形一つでどこまで論じきれるのかという問題である。もう一つには、姉妹芸術としての詩と絵画という理解は、ルネサンス期に広く共有された概念でもあり、その文脈で Wroth あるいは Sidney family をどう理解するか、という問題である。以上のようなより大きな全体像のなかで自らの課題をどう捉えるかという視点が本論文に欠けていることは惜しいことではあるが、いずれも扱う対象が多岐にわたり、龐大な基礎研究が必要になるテーマでもあり、本論文に不足するものと言うよりは、本論文に接続しうる今後の研究課題となるものと言えよう。

全体として、本論文の議論は実証主義的な精緻な詩の読解に基づいており、また、丹念に先行研究を踏まえてなされ、一定以上の学術的価値が認められる。博士の学位を与えるに足る要件を十分に備えていると判断できる。

3. 最終試験の結果の要旨

最終試験の口頭試問は、2023年2月9日(木)10時から11時25分までZoomミーティングで行われた。本学生による論文要旨の報告の後、各審査委員から質問やコメントが出され、それらに対して本学生は概ね的確に応答した。また、上述の本論文の短所に関する質問を含む、欠点の指摘もなされた。それらに対して、本学生は論文において記述が不足していたことを誠実に認め、それを補足する説明を行い、本論文の位置づけをより明確にした。最終試験の結果、提出された論文には一定以上の学術的価値があることが審査委員の間で認められ、口頭試問にも概ね適切に回答したことから、博士(文学)の学位を授与するのに適当であると判断した。
